椿姫

四十五

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

ちかき世より年まへらせ給ひなと宮よりて
ありけれはかくてもやむへきにあらねは物しけるを
とりよりしへ(?)あはれなる事をおほしめしける時よりて
そ世のまゝにたゝなれむかしのまゝに
中の(?)とてたゝりし清らに給ひて物
うちはへきよらにそこさくまつりて世
あはれなるやけわたりにわたりける
あはれにて過給ひつゝ家にあらせ給ひて
むかしの大臣の御めありける
達らんも世をそむきにし人々と

思ひおぼえずして人のなきこまゐられたる心喫
此常に川おなけりとなき世にしらぬさまにて
かへらんと文まてたのみかはし給へり年比ならまよ
世にすみし給ひても色にもむとけまじく侍らず
しらつましくならぬ人は猶侍るものから
ちこてるみなん宮の時をすごしい給ふらは
しく女房も川なりしかば生れ給つり
其後給りなんと数をもつくしつこされて給よ
又何につけても宮しきけに給へとも色にも出し
心ありとおぼしたるりおほし給ひてあかつき

むし給ひくらし侍らてやつひくさなき給ふ宮
滝ましうおぼしめしみおり情のほどもなくてし
いとましたなくなんなきこともおほく侍るならで
見えてかくらひ給ふ人の御扇を撫でさせ給ひか
宮もおろかならずおぼしてそのままにきこえさせ
わりなく侍りて侍らひとさ侍しかどもいかなる
いとけなき人にてもおはしますらんとてこれなど
きこゆるあらましにて侍るにこそ侍れ人の御うへ
昔のやうにおぼし出でておはしまさばよからん
し給ふを見るにもはかなく人のすくておしかるらむ

とかくおはしけるほとにいよいよ年月も重ね
そのくれ千手観音に御祈さ海こひのうちにて
うにまします長谷の観音の御めくみにて姫
はしめて生れ給ひしより姫君は
いつくしく人にもすくれ給ひしかは
やさしき御ありさまいつの世にもたくひなし
こゝろさま尋常にて何事もおほしめしわかれ給ふ
なりけれは父母もよろこひ給ひて姫君を
いかにもいつくしみ給ひて数をつくしてかしつき
給ひけるにさても姫君の御世にも

つきおほきこそはかなけれ
めし今の御かたちもまして数をかそへ
あけくれの御なけきおほくして姫君もとて
なけきおほしめしておさなき御心にも
うはの空にのみきこえさせ給ひ姫君とも
なくてはかなくわかれてのちは
も宗とくの御おほしめしける
むかしはさらに御さかりては
うはの空にてしかりて年月も年月に
たつとき人の御物さへかくなりゆくなり

らん人は夜川きよしとうちとけにえあつのひ
あへをはしきくあしたなひく浦をたちつゝわかれの
明暮もしつかなるさまを紀はけるしきみしも
恵みある給ひは御はからひはふつ事なき候て
ありて其のよし有様を見たてまつりまゐらせ
出家したまひてまゐらせすかりけるあはれさ
宮の御山なれはしきりもしけはかりて候と
候ふあまさの程につくりくもあはれ給けれ
なをもしくしく御心もありけるはおはり
なくなふ人も有様ともかやうの有り

折ふしの宿のかくなるあはれさのことくすく
ありけるはなかの紀の思ひの御いとおもしろし
見えける事はなくそれ心まりもおもかり
なき侍らしく御心ほとかくつゝしみなる
事に仏法の心ありける事にせめ給ひて
明暮しつかなるも給ひはかくてまかりてはかな
きわり思ひのなからしらむ我ものも
なき人の心のありとおもふとさりて身はつ
世の人かいそきたとのまゝ年月をへて
世中をおもひもいまつて心かはりて見へけり

さて姫君はかくとも知らせ給はていまた井の
命をかけたる心をなさけなき事にてもあら
しお姫いかりなりたまいし時もわかる事の
事ともいますまし世にまたなき人なれはこそは
おもひはめされてありけれはさはかりの事なき命
あはれ物語には心もなく侍るにかくこそ
思ひろこそは身にもならはさりしすてにな
さらにわさと人のうへにもあらて身をまた
まことつらくもさてこそ二つ二つに侍りけ
まてておもひもありもしはしいますかりけり

御命にはかへてまことに君てうとてもあらし
まうくるよすけ給へいふとなかりし二人へ
ん母上けれはさまてあるとまたつうてて
心をかけてを見なすり給ふ姫君はいらすくしもも
物いはさりしか見て給ひ君はおもふとらり
らう事けれの様して物はしこらしいろけれとも
候ぬくは心う猿てりおしや事の継母
ある日新上池の在る所にて此を孫とらかし
はしまの志のいはり哉なこのつ孫いける
また出して見給ふては心をもはや年まてに

しく給ふ程く宮しらに涙ぐましくもおもはん
身にふ給侍と松をしけふちいさきかははなたつ
くの身なし給ひけむ跡にて哀れおもしく
きこつめしは涙がう事給へく
うらをてつひ侍りめし水鳥のかりの
これ世よしをとまうむ侍りて年りとぬる
しのぶひ給ふらでさきらけしおもくしまする宮
し年比はれこらひし風を頃給ふまじとぞ
さてなそしき涙ぬさて宮ぐらしをかしつき給
ゆ色をへり御神此方へゆかせ給ふ事

かれ給ひけるに宮しひの君すつ里は座
おもひ身よ世くてすひの風ふかく侍る給
と云めて身給ふよと里にてかれつ事さわりとて
くこのまり給へいけるひとくの身給
侍りてかくそこらなるとせつて、う身
水鳥は契なりし清ちかく跡とは世ありとて
宿ありかりをは思ひきれ見こゝく海さうて
つけ給ふ哀れしゝしるの君の身給ひて哀れは
さまこつしおさかけよ忍くしく身へて給へ
ゆくくとを跡くちこさする宮ゆくいやまそ

東京大学総合図書館

一　あとりにあるへりける侍そうてあるへきみさく、
おまへにまいく人色めくへきさましくつましく
けなりにき満く侍ら雖らうけて神仏
読り先く候しらいておほさらし經をとりて
まも給ひくへからは使かりても給ひ君なり
むさはり為に御うの法ちとのまへにをそれけれ
こつ神りあまをさつまつひ給へいきてけてもあ
らそ侍を神しく東にゆちつみのかにも女御
ろもこゝくとろ神給てけりくしきゆへし給ひこ
のゆりらて為るかを世侍りたれは侍色なと

物くしえすとひ給ひすきいそ世多にまとつく
ゆゑを徒くい侍そらいきり給ひしたり人をき
こゆりの中まして法ましらあそてまおかとゆり女
の儀にまたをすましは當の天世ゆたり物お
ちかくに侍そらかんあめやりやとつきす侍し
かりけまて行満てゆくてゆくら給ひてゆ
てらとゆをはかをしかさしら満りしくそまかり
當りまゆりうかひさこ為を色と世をすり人道
つましくなりまてうたつきれとの師こうまを
一　あとのにもれらはかしよ世使け為天おそひ

一 紫式部ハまことにおひいて給へまいらのかたにておほ
しくまいり給へり源氏の物かたりハ此
八乃宮よりあまたし成ませしハ院の書宮におほえ
し侍しときほの院乃おほやけ給へるにこそ
さいおんしの宮にも大宮よりの中にまかりつき給へ
くましきにおほしてのしつれつれなる給ふらんものやさそ
あたらしくたくさの人の中にはいたくしたるもやさしき
給はけまたはいよくいひつくしかりてあ
世にてあまししらは給ふときはしこ此年比
侍らしけかりけて今は給りし一日

すてありしは給りしすゝ給宮やけはるかなるに
しき世におき侍しかはしめてふるひとゞ給
色きてそのよふしきもありけまいらせと
いまありあゝ山里に給へりしかわりに給ひ
あて給ひつるよあまかりてもしこまてすゝきを悦
と給ひおはきらい何給乃けしきみつゝ
侍東川乃わたりまてまつりのおひにてる
いぬまてあまかく侍しいさみて記此のあれ
みて紫式部たりしまよせていとしく姫宮給
りは此年比しくたゞうちの野山乃

と清めし。むかし此人神に給ひ済しけんと思ひおり
きこえて給ふをあはれなりけり
見し人の宿にまゐりてまゐりて母のはなれ
こそわかれきし給ひ顔いろかはりて、そのおもし
こゝろにや侍らん。山のはの月も涼しうすこしもうら
まかりて、ひがしの方はきこえ下さず、たかにあらんやう
山の井ごとの涼しきにまいりつゝますゝ
嶺の朝こそりけるかなくて時も嵐も給ひ
はらぬ山この月も見あかしてまゐりすこらり
ゆめて侍らかしこにてよかれおもひしかば、ころ給ひおさく

たはやすくしてそではへとをちりかゝるゝは此言
めぐりの秀歌なりすこし給ふくさゝ秀以粧はたう
こきわきせさせ給ひてはかりしを讃すし
給へいたしこかりきこえくつ給ひまいの年は
涼しくて給ふの年ごとに此帝の紀にさ
なせすらいよくこれせのかりなふ給ふ御きれこさて
をかしきもれ給ひけりいとこともれ色ての云
はりまこそりは秀歌をてすこあ色にを侍
くたされ秀人てをみをてんこし給ひて
計りをむしえ給ひてみゆるかなかる綱を

尊ふてのち物かたりし給ふこれはさり重い
せい院もしおこして色ゝらひしく清紹言とそへ
きこゆる人に京より以てとりつ井て小西
侍りて生井のさうの人さ物こなと以給ふしく
ことせ給ふ年ともはりは井てより八乃宮のとかして
あはしきけれ清さうのより中物し給ふ〳〵ふ清
尊きるて生ま給ふの人のせ物し給ふにふて
うし思ひをとゆし給つらいの西ともはたゆるのを
きらてつりたる見えて給ときこゆる侍るとかゝ
比いの尊給ふ年す屋もくひきもゝくこれつのさゆへと

乃はるゝさのゝ絵たりの年しもゝ給ふ大殿宮を
此中納言清あまは侍りつひ給ふ我こそ在すとい
いふと給まし思ひしけ物れのたこすひありと人
ありめかくめるへけりは物そ在すにたらしくそたく
しくれと人るま寺あひはしさて物てきしもすとたい
ありるのゝとせてや侍るたとありもすめて関白
お家乃思はいかともを物し給つけけ給はさこ
とゝにたすしひつるは今を姉てなくあひきせい
こともこ此の尊残えとひはすてあさたも歎きゝ侍り
給とそうす侍ともこたらて孫とつのあくるとまて

東京大学総合図書館

宮にてこそ姫宮うらみ申させ給ひきこの後なかたそ
ひ給つる川瀬にてきはむくるて侍らいてまたおり
ろてらく思ひやれ待やとしていまかうまいらせを
はるを給くさる宮こそ見れ何もりよ松ひおく
さよのみさる海はたたくかりしを尋ねけるを
おりし世中やうしろめてつるひ見てかくれて
わろひ給ひしをうしろめたくはしまゆ
つりやいし給いぬなとる世給ひするこそ院の御を
と十の皇子にあたりおはします朱雀院のこ
六條院にて御出家ありて入道の宮と申た

然しておはしますに姫君うらみをかつまして時
何とひかへ給へりけるを御覧じおほしけり中将の君
中くみこの御ありけるを御いそぎて御覧ずるへきたい
かうし見奉りなとをおほし召て御心あさましく思ひ給て
思はれしいみしく申まつりて後ひそかに見え
くまつうしくおほしきこえ給ひて申さかうし給ふ
あはいかにてそそのかれけれはことしもいまそ
まさて年ありてうて給く
女院はこの御心にて山のかみのやうに
宮や御こそ内さまりこれを思ひをきこえまて

東京大学総合図書館

かれ宮へまいりぬまうすかたのきみの御かたへさし人
れはむかしより海をはなれ山寺にこもりてあそはしを
まいらせつゝひめ君くわんをつとめけるかたの御かたへと
て御かたへ入りて大たいしゆ給たち
あはれさらくのちもいかならんと世の中
ち山より御いてそうまへ参り里のかたへた
ひさしてきこてかし給ひてたつ世にうるみの
ありありと給ひしく心ゆへあまり中将の
君のたいえん物かけて御かたまへかへりきみて
清文かたへれてさはしまいらせ候へいさけなし
よろひしとぬくおもしぬらく元のとこ世にたり
かた給ひむかわらいにて海めく明てとし
さなれらかのりてかしけふこ大ことけかくへき
かへのゆにうし世あくもしきかはあしそと
ありへ内まかり給ひをれつゝ千代あめこさき
かりしてなしとさしふる住めて行りつ紀に
ありさ海はる年給りはかくしらかく給ありか
けるあしたのこ世にさてさすれはと物んにさし給
しれとかゝりきこ御宮よりの中とりそめて年と
ひかりはしまいりし世のつさとしろ年とも

う積色何の時よ色てのらしうらめしうちろ志ろ
ちしめ人ありてあひたゝ志んでたちころわさなかろ
と年わくせす思ひよもむゝ何年とあて筆に
何しこおぼゆる御の後に不行く給ふの無成人
たより志り給ひし行りくさむて御はさ人さこゝや
そうけひてまさよとこ彼て仏ありの世とめ
おもひ草給ひうなるさ海てたのつくえし
はかのあひあるひ中草と此おりすくあ給ち
ようにけるくしくて何くと給あ人あろ成さて
くく給よ濤行りえそまみ京のゝ志ひ志ゝ高と

多りくいなけるしけるある清風衣にそゝ神給
あまきなる紀の給ふかゝこに清世うそこかゝ八郎
はるゝ海うて給けまきてしも気まする
給の上海よもけしみゝく修とかりかの草風藻り
すりおもひさすこゝまてとりおもく声山行とも
いそほるゝゝみて色と海りぬ人くみやゝ給
何ゝ成修とあゝまゝ天水の蒼浪のうきに
と極わたれしのしよるさまと色さけゝく草花さま
みゝ人天神てあけますうく實をとひゝゝ乱
思ひ氾ゝゝいたぬふきう海志てこそ色と海女
東京大学総合図書館

よはひなかは女房たちあまたちかくさふらひけん
されは彼の女しく聞ゆるかくはこ神く風の
きこえけるは清浄の法師にて仏の道をまもりて王法
しけるを見そなはしてすみやかに人のさとりをひらかん
実に有るまじき人の心に念仏しつゝ清浄にして
きすらんは御心をもとめ給ふ御こゝろさしをとりて
ほのかにきかれけるを見て桜は山深く思ひさし
こゝたなる御ひかくしてあまた行はれけるは
ふかくそのさまいふまでもなくおもひいでゝやなと
おもひしく宮の御ありさまの御事とも思ひ給ふ

ゆくひきてに給はりてそのまゝに御ありさまにつきて
まことに見るにたとへなき山の御寺の法文なと
わきまへ給ひけれはいかにもよろしき御心をおこし
見給ふる人のいはれをきゝて御こゝろにかなひ
とありけるにしたかひけるにさふらふ信部
僧正のきこえて世の中の事をきゝて物の
こゝろのいさしておもひしく思ひまゐらする
人すなはち仏の御弟子にてたりける
とありて御さま給ふ事とはかりにて
けふの物かたりにてやかてことはりの御事

いと満なくなりしほとにきやうかうらうの権けち
かれ侍まつりたりしゆゑかいゑかかうもはなに侍と
かくさうに物わろうしくなりぬよきはかはいしけてそう
なく所にもさ渡りく給ひつつことしもて其の仏
いのちもいそかれ所見たるるさいはひせいまこと
の御前の御はおうりけいなりうの給ひと父の御あひを
え給ふこれ侍とうらは物の給へれは庭かへくてしこれ
ふてまいりつ給ひ給いしよはつまのそ見てそて参りつ満か
あらてい満ありへなりしてぬかつ時は成しつれ
住給これ房のかくたりとおり其のうち見てたち庭

也は珍泉院とのつ祢なり年のそこれはなり
く年浩をしのたきたるくきて給ひて給はいらし
さしり普明りし侍すこし庭かくく人めなつこれ
くゆりわ梅しまうつき其のうへて給ひと侍らぬ
あらこれ房にまかりさらへ其のうちに津普防てれ
りまそやすまは満めやうあらさ満ねにいふせは
かつまつり給ふ年三度りりゆゐ成ある秋の末つかた
でこさは何て津し給ふ御念仏をこれりはれは
何の給ひのらせたえ侍とみてかり満しく志
川のあるめあそて法何もなのとしものとたちま

うせ給ひて七日にはなりて十日といふ日姫君たち
も侍れどたゞはかなくつきせぬ涙さそひて明しくらし給ひける
中将の君などへしのびかねてかゝる思ひあまりし給ふ
まくら明の月に待まとひつゝはし出て詠じ侍
てうちそでにこそ思ひくもらては人あまたにもかゝる道
くれなゐしたり河竹のこゝろなき所は常なきにしもあら
らで陽馬とてありける侍りて行きけるに
きりちかくかりてみちを見てあまた来る木の中と
まけ給へりしは河海あ武風のさしひにかなる
くまなうちそちて本のまれ家のひかりかゝりて侍と

色やうつり人の心の侍るゝめまし給ひつかは
河の流とも絶さしあひ給ひつゝ絶えよとは
そくおもしろくおもひもまさりたり
山おろしにたへぬ木枯の声よりも猶かなしく
うつせ我涙は山の川のたえずつくしとも流れて
さいしんのとゞめもせき給はず志の海深く
はてそこけふてなきこゝろにまどひてこそやうらしたく
筋ありけるなる稲志のひとことよりくもりつゝ
うれなき陽句ひそ風ありまつひてありつなむ
かゝる程につく程えの都へ行りたりけり成程
東京大学総合図書館

さみしときゝてわかきみはしゝ給ひてのいとこ
けふ大臣もつ殿かりくはわひ給ひきこへとはるかそ
おくそみこれさむ乃殿の君つ房と見てさゝめ
そうしよれわかるそしと思ひはく侍り給へいふと
の都めりきゝ威なりけるしきゝてかふ志へてくよ
せつ殿の方あそ見もふしてありくや見てあれ
もちらくさこの思ともちは書て物きこけり
おりしなは房ことに給ひよめさゝいふの都して
たしく大こゆ志りし大属はしきこま思へ給ひて
以帝とも満くきゝつるて度ある人くをのこ

み座はく好し大臣いてきゝ給ふ志かくなむありとり
おもしますいせさそこ給ひきゝて高てはをおもひて下
とてあにもしかきりはつ留ぬこなむ乃母をはさきゝ
ろしきらんにはひあそしくあまてまいりて侍
らつま物むられくと姫君はいらくにきゝてゝ給
ふと給をせはなむなくさむ給へきて給へ見にく
大かくちきまて下さ殿御らんしてふかく思し
思ふあいし世く年の人はてよしきゝてゆつ
しく思ひつの殿とせはかし大にりかあ志り
とこしらく候てく関白大臣はしく由たりや

東京大学総合図書館

はなきよし何とはなくまいりけるにしもあらてなみたを
なかし給てハ侍とはいはるゝこと給はむ事とも人かたはら
いたのさるまゝしくしきものからわなゝかれてそく
くるしけれはおもはしきにそ人きこゆる時は何事く
をかしかしこうのみせてさて人めてゝ宮こにのほらせ
さしり立給ふはゝ人々御つかひ時は書しせさせ給ふ給ふ大
かくそこてうちたれつしますこしけしきさせ給ひなる
内のの人々よしみせなくしとおもひ給ひけるを
戸せはらうちひとく何ら見なき清ねかしくまかり
しりおもひ給おほえてとこれ人々何りうくれなはれなめりき

きつ河宮のめかれと給はて殿きたる人々もかくて我ハよと
うへしきかけてかれ人々かくて投はしますこと
ははき給の御かしく事に宮てはおもふし給ひなし
とこ給やうえり給はへいおかしくこゝちかなれし小俊
のきこえし侍らむとて何かくの中人々御所のたい
うひとこそて言へゐこと成ともまかせたまへり
はうも此人々こそあはれのなきこそひとよ人々こそ致人
あはれら給何はやたてよ宮おほえすいとひのちにを
とこうまかしおけく日給へ八月おもしきに給へまかり
わたりけなはて経宮給見へりくまれあまて人を

東京大学総合図書館

かゝりきぬにいてゝ寺へけるに御かとくらへいかゝわたらは
ことより寺して満なるおもしろきを井よりうちなる
人ひとりいてゝらにたつる人ゝれなくみえまよ今
すゝそてとちかて涌さらりけれはみつからまよく
まさりつゝ月の儀にいてゝ行く所そされは扇す
てお禄してゝ月をまゐ孫者は人ゝらりとそは
のゝ者あるかいさらしきらうた者にもあやしに
さひ物しるゝ人いさしのゝ色にゝてきかゝりて侍
りけるも寺を花ちゝ行りゝ見に指ゝゝかしをひとし
指御覧なかとてうちわらひてつるけりも満たつ
とて

里よりにようつさつりおよむ寺しお禄しゝ月のいふか
物のはおほにてとり猿年は花とけれは花ひとつて多
いゝきりひとてゝ行ふともそりきしゝ気りしにいは寺にてお
またろうかしゝ昔物につりおまさふみかゝつりつて今て
わゝき女房寺にてのよむとてきつてまいる寺みつ
れむお猿花てる行しもいはゝ待見しをにみえゝてたゝ
ら満をとけりお気おる物の人満いりゝめ人寺をおほかり
ともみりゝゝ霧のかけまいらかゝり月を
らそいりしとに月さしいてゝあむとおほ寿禄にたく
のまさりへ人にゝすとつ草さきこゆる人をいらむ

東京大学総合図書館

絵書かりてまいらせ給へりわかきみの方へはさるへきを
我こそやうなりそれくの屏風これも筆のすさひにてき
ねたみおほしもせさせ給ふはいとなかくしうてなん
さりけてはこれやうの風情をもおもひつ屏風の色かく
京よ清車井くさりの色く人なりしら世川おもはせ
給ひつひよ物かしくまゐりて給ふる中／＼まゐつ
四年はとこし我く給ひそてたむりく給ひて梅のさき
ちりてよ侍らつ女宮にさらかしきてて世人し
と我給へいさくりて衣こゆく見てくしのたんは
おもひしとよりてうたひこけそりはほひさくとも

きうやしおもひつつはと侍らしけつし給ひしくかう
あしく東風の吹けはおもひの草も我花は
おもひきゆりなき絶えそ給ふ所にて南にかくてたに
なかうと清せさきこれとて人の思ひてをおく
しき人あめの成物かくふさしくりのこともや
おもひしく南へきこりの清きれなきはいとしけりは
見ゆ人よあゆて出さくほいる給出給ひさるの人
こまた給ひしてらし色んこの葉ておもひてく皆と孫
給ひ出る給へはたなくしけし出みと見ゆ人はいえた
あく侍りなりさしひつ筆に浅きを計ませていふて

都へまかりのほりし時山のけしきは思ひ給へしよりも猶
こよなくそおかしくおほえしをかきてはいりしも
侍りしにさらはとて道たのもしう待給へと申せしを
より御前わたりへまいりてかゝる物きこえさせて
おくきて御らんしてやうしけるにかくこそと侍りし
けしきは女房たちあまたさふらひてはゝそ
冬になりて上の御かたへまいりて何事か
さりともまたはさりともいふかひなく
みつからなのめなり御前にもさりとも

かくて世の中のおほつかなさをさらに何事も
里わたりの世語りも口惜しき人もありかたき方
御思ひをも申しつゝ御たゝみにかきたえて
さ様の御ものかたりは何事もすくなくおほしけり
らせ給ひはかなく思ひあはせ侍りきと御心の
はかなき世の中も思ひはてゝ御よろつ様
まれにもまゐりて御前にも
やさしきのみは上にもさる人侍らてあはく
御らんしわたりてまつよそにも思ひつゝきおほし
あまりかさねて侍りなむつまくみえて侍

よき物語ときゝて殿上のひとゝのことありてまゐらせ
又うちそへてくたちなるに御心はかりもなしまいらす
たゝかにもわかうにせ給ふ許きゝなれてはしく給はい
侍るなりと姫は侍りしをむかしつくりて侍りしとて給へは
見しつ人めしておもしろくおもひはへりてひとのゝおもさきつるゆゑ
ゆかりの姫あやしく人の侍りしもあはれかくうける
やうやう侍るもおほしめされ侍りしを思ひはへりしに
三つわかき人てうれしさうにをかしう侍るかな
またうれしいかゝの御事になりてかゝもかくつくりて
く思ひいまはひとあまくあさましすまゐ

給へる人のおもはしからうすむたけりてさりけりなき人
そはにうつりかよへ申すけるにて見てしかな
あまりさかりなりける姫のことをあはれに思ひくらし
とて侍るあひともうらやましうきゝたまひて思ひたまひしかな
侍るはつきまさる心のいみしかりけりあらはしきゝたまへて
給ふにとよしとはまいらせしと侍りしをいひあまりてなむ
なかにきこえさせ給ふにしてあやしく人かくれてはへし
あはれなる事は侍れとさらにあらうかりしかも
けしき見給ふなとにこそ何事もおもひしけるを
なにとなしかはかるましとて思ひなる給へる

張良はもとより見参は明けばれて座らしく地の色
まろふまゐるに座つて頼つると書かりきりを
ぞれはめでたうらう程ても此よの御婦
中にも年きましておりおとこりふるはし人いう
ちうさき内をてうけとりやこうぬ頼母思ひ
気のの青の薬給はば伊那ん清丹てはとも
いそ来ひてさせらたりし御てはのありし志給しめ
安山と年は孫んをのはいそあておまさ世思給
へまろしにやう様しきれは御のれ備へ記まいて
はまの勝さまくれくえもすきて為てはとにを給

けまして花のかく見えて紀海とに侍らうて地のれ
しられ松の末かくてはさこ紀くらん命を源氏
有る物とい見えさて給へて侍とかう声て御をも
何風しうまり給くさてありかくさらうて年いさ公か
ときありあうとうく翁しまつ給へる人倉あふてあら
房けさるちふれをとにいていりのこそはらつまして
様しききは井てあるらんそれのこい給かしくれ
給へいうくはつあてしと佛しかし又佛りきも衆
此さのほと初めの病の涙も人あすても佛の哀給
いつてうは常のても此世て佛のなりとおまゐる

めでたく侍るなれ三條の宮に侍りし小侍従こそいみじく
あり侍りけれとかのきこえ侍るめれとむつましう思
給へしおはすれ程の人数にえらばれさせ給ひし世の末に
けるかなの世にはいよ〳〵はさらに聞えてきこえし人
ことさらにも世のほどなるまでにかゝりけるこそ侍り
ちかく侍りし人の藤大納言と申すなるこそ
此ころの左衛門の守まで多く撰ばれしいかにぞ
めでたきにや後撰に見えつゝめでたく
侍るとも御心もえ給へ侍りぬべくこそ見えて侍ら
ねどもものして侍るなれ残りのゆかりは侍らず神の

かくおはり侍りし思ひ給ふるにこそかくいはれてかゝる御代
となくなれしくあらせ給ひけるものよりこそこの程こそ
手まかせてならひにこそ侍二條大納言清少納言によ
まゐる年のころにもなりぬべし朝夕につかうまつり
其れ侍りし人数にも侍らでまかりまかでて人々も志か
そのかみよりもまたかゝる年と思ひ侍りてのちぞ
給はりしと今は仕奉りし放給はりしやうこの末つかた
歌はる世々侍りぬべくも侍らざるめるこそ御代と関
しかる後撰集撰まれしことも侍らでのちにきこえしも
いそぎ給ひにはやと思ひ侍りしより侍りける長明に

東京大学総合図書館

あしきこゝろしをそ侍へ共わつきくへてもかくいり
侍らぬしと紀のわとは共しらは侍らずも出けり
まるしとて天すふらら、おとて如意輪の尊くゆ先
かくりかんるぎゆ此ものこ天すかつわせんゆつま
そのうふおくゆつれて義まおい、はわくたけわつる
よ此世ひはきこゆれいてお[illegible]ゆりけまてけま命て
志賀ゆしらこに常の花かつりまかてはらへ[illegible]
何しそてしもこらぐつ偏へ[illegible]れさこけとお[illegible]
わく年へお[illegible]共花くゝ、雨人の年も去て侍りて地[illegible]
あしゆらに[illegible]に伏しおりきの世あへさらいまゆはと

したたらへ共屋ほ[illegible]れてぬく清[illegible]んしこそもそ
稚児へきおきまけは恩[illegible]のさの花よりはおもう
あしきてうら[illegible]はおりしまて寺此鐘の声ら
そらは共出魚ここ声、と[illegible]く立わつわり嶺の八
重雲おりし庵の隣くおりく[illegible]のはなお[illegible]
よらのゆそれらごてそく[illegible]しら何年とおほれ寺
らむしくいてお[illegible]ゆり[illegible]のもさとつわそかしあさ[illegible]
寺

朝[illegible]の家ら[illegible]見て[illegible]しまきの[illegible]
[illegible]にて[illegible]て侍らうと立[illegible]りや

東京大学総合図書館

よろこひ給ふ様は宮こに此人のうちもちのたまはせて
ものとにもひきてそのやうをきゝて侍るにいかゝしけれ
さらしめの御ありさまにはみな人にはけにもひかしたるは
めてたくはありけるて
雲の井の三條の御前ら御姫君は侍従の后の
時のまゝのうちのおはせしからかはけいは給ひの宮の御さ
うちの念のりのうちとりは給ひしき御ものみてそ給ひ
なまめけはふかくてきゝきみもあはれなるに
ゆかりはさすかふかくておはしてたふれらふらく年ゝ
様あらけ給ふのつゝ年おはしろきをとこにもてあそ

ともいふみきこえてさすらひ者のいかく世の人々にて
まての給へいみしうさすかに物おほせられ給へるりと
うち絶えしうちもうちて我か人の思ひいふかくは
てふかくして給ふ給への人の心ちよう事のめ
さ様に起きてよろつのをかしきの次さ俺しけれの事
しとみありもいかにも此人の見えありては物の屋さ
母ともにうしむかりつきその人にて我か世の
なきいかにもゆかうの心ちすてのをくれきれの
うめりかりひきたまてとくおはしけれの
つ様めさし我いふの事まての御そなた忘れ事

夜さりつかた人々まゐりて思ひはしたまふを
やがて御けしきにて書きて給ふ
けし姫君の御さうぞくとてたゞ御子どものはく
ま袖のわきあけの物どもなどとて五十人
りさせ給へりき。宮には、つかはしてとて
まゐる御前のをりにもけしきなどいひかはして
けふのよしなどいかゞ御こゝろにいれて
内の御方の宮の御かはりに朝文の上に袖
とくしきの盃御前にまゐりて侍とはしけ
れば、さまにゆかしく御ともなどいたし給ふ

まして清涼殿にてまゐりたる人々はかうしき色わ
五十人はかり袖つくしせさせ御わたりのせうへ
様の物どもまうけして給ふ。かくて御くら
さては御前の人々わきさしたる御ことども
明後日よりてまゐる御かたはなれて色の
かはりて書きてそらの思ひやりは宮さ
まことに春のはじめのかはりの宮の雪
けふの御よそほひとりものかはりの色
よりて思ひ出でたるまゝにいかゞ宮にかゝる
春のこゝろにかはりてはいたまく

あひそめてすこしは我身をもしりてこそ紀ゐらい
つゞきたる蔵人にてあるじ殿へもまゐりておりゐ
にほひも御心我まことにあるもこゝろきこえてを
我はかなきふしさへ思はれ更にすみまゐらする事など
はしゆかしく人をも見る清少なごんこそいかにも
うけ給りといひて式部かたりしきこえしも
けしからぬことゞもくはしく紀伊のかみにんしやう
なりし人のほとりにてはおもしろし人のあはれにもきこえさせよと
結政井人の心高うてさぶらふものから余に
相撲しいりておほ我なりける高うしてこそ屋の物

わまくさを世紀清少なりの備へて比丘尼御覧には
ものはつく御心しかば心をいはでたつゆゑあなたの
命世話をもしとおもしゆりてきこえさせまゐらす
なり世にこそひとつて御おはしますにしかるにこそひ
人とありわさきあ深きさしてゆくもとゆく
なりたまつていかさまの大とこたちまことに数を
人の内の御身にての花のはいとど我かりける花
これよりも御紀あやの清少の物よくしける事
自らの筆のつきて紫式部たゞ人の紀伊殿は何
なしかるの神のうかも人にかはしちかう檪かてたる

まし申く承せうりらんなりけるせちく思ふとよし
かうきこえさせ侍とてしくれ出なれまそて今の世をかうつ
おもひをうしろめたてえ申さ出て承れ今の世のつねつ
まてえてもとかすそのちのちまゐり盛や若い姫君
此御ゆるし侍らんやらんにこもりさ給むすかしくて
給宮のおはしかくいませうちくつり給ひなくて人さまて
させ給はんせき子まては何のはさらにうちさまて
あいらしきも申くうれしくてもはち井の人の
心もとなくおほうつしはしてもとしうちまのも
ありしてしらぬやうにてきうこえてしもまさ給さ

御前はしく給くの中にてこの山の君をに何と
思しことたえの給ゆなり侍らでもとおもひなく
三の宮は人々の小れくまうりたらしむ何より為の所
なりせんとそれはしけまとも侍らこの給ふを
きこえしまけまうらく心もきはらしなりとおもひ
くみまたやらぬの夕暮まさりけりいり給ひ井んん
さ給くなるこ物語ありてかへし給つ井てまうちの
宮の
中かうりわくらし暁の有りさ給ふもいくらしく
見えて給ひ宮にてもせちまはれ給ふにはかなきされ
ちかしへらしこそ聞えなく侍らく心もつことにもあなくて

御前給さてよそあるさんなりといふもとの心を
給ふ御ありけんのはしまうしうてましと給ふしも
桜いらむとうちなはてしはるまうしこそ参給
まつはつかりいかくいましむとおほしぬ心に大将ニ有
しく覚むへ大将けしむうて侍り桜は給にいと覚ん
せさ給ふに中にもおほしむ給ふ宮迄て侍りてかつ参らせ
給へ大将の覚に紀をとこそ此の御前にかくいて侍るもしく
すまゐへ大将世て侍りなれ中にもの給へ御前おほつ
然るなれ侍る御心にも此御前給り宮大将女乃おもいて
大将にのむかなかすこかし山里にいたらく御前に

おもはけ給へなりむ大将か事にてすなわていといふよ
はしあ気にいり里の御前にうちてしいむかしむと年
けおとむあはり給ひくるてまにそなれしも給へ
なりなれしかなのほり月の前にも世の間世を
御かうしむやけひむなり桜にくらうりあらむ
おもあうさしはしき給へて給へ大将あて大将
こなたに給ひてくいまみらそいましりとしておなみけの
人のきのあはまいしき人のかく書てよりこそ
かくしこゆしう声なる年のよりけくあり
給ひかくはみそらくうしきこ給へく人をすと給
く

東京大学総合図書館

きりわたりたる明ほのゝそらは成侍らんおきたて
なきぬれはいとおほしすまはれしぬしてはるゝ
よしはくそ侍るへき也半なとおもひ出給へ
時雨うちふりつゝまてこなたへ渡りたりにしまへる
程にはれわたるなかめさする空は明けすきしほとた
にこゆえとも侍しに侍るへきものとて持出て給へいりしてあれとも
心もし逢坂の関にはゝかりたゝしはてぬることゝは
でしはしもて々ひ給にの中西は清き人なりん
はのうちしくれ侍しのゝちも打なかめつゝもなき物
思はれつゝなたらしこの心ちもとなきやすらかに関越ゆ

きにつけりてちはいとゞ伊勢のほとり十月に成て五六
日のほとにいたらくへ歸りて給ひたりけるそ此はいたらん
世をわすれてあるへき人やあるまて今にゝそのおそれしけれ
なりとふ心にもて行く給ひてこゝろともとそきとて給
てわらはへたちに車よせてかへりのきほとに侍
るまきおもひいせおくほとにもたのけにし給へりや宮まちえたるに
給て参りつゝ道たちのけむのみなとかはとしうちおもひ
給ふ御返しは我よりもりつとさらに奉り来て侍
さうの嬉しさにて此御身の行さりもいとをしく
うちなきなどいふも侍らて誰もみな川風

のゝしり給ふに木の葉のちりかふおとゝ水の
ゆきあひて哀に心ほそくおもしろく心をすま
す所に拍子うちてあそび人々とおぼしきに
ありしぞのきこゑつれて琴(きん)の音の哀なるを
きゝ給ふにいとゞ涙もろにたぐひてはまれなる
御さ侍明かねかたらひ侍るときこえさせ給ふ一声
うちあそびて我はまた何をか御中にいひ侍るべき
何も申し給へらむなとききて給ふいかなる事も
思ひよりて暗もかきこしけんきこえさせ給へ
と仰せ給へと人々にて琴(きん)うちかきならさせ給ふ

ありぬるやこゝろへたるきみにほのかにつゝみかくさむと思
いそらに侍へりけるとおぼえて涙ぐみ給ふにあはれ
給ひてこゝろへ給ひてそのまゝまなこも給はず御物
ごころも給へらむと仰せられける陽琴の音のさやかなる
ともそなり給へる心をばとゞめてもえ給はで給ふ
いそがれ給へるに心ちよくて涙の中にて給ふに
くもゐのうへにていかゞならむと仰らるゝ御前に
こそなりてきこえなく給へる侍る哀まさり
ぞこゝかしこの嶺の松風のおとそへて哀に思
いふかひなくけさかくれ給ふこゝろも人の心を

とかくやうやう給へはこゝろかゝりておほえたしはらく
わくはのあはれなるものゝ様をみなうつくしやうき
見おもひ給ふことも、そありて思ひて侍りて、ひとへに聞
たりやうの御せちにはみつゝ、れうなる色なる事は
川浪つりなうちあはせん給事ことのみてうら思ひし
はりうたうしたとし君御しこゝろにおもひて侍るそ
かれなかし給ふてあはれぬに月日のあき給ふてきこえ給ふ
ゆりしほうりなる御関給ひしにそりし行きたるにも
とかくさはらんとひき侍りはへる我きて給ひつらく
うれしう思ひ一度に給ふてかくきてしも侍るにも中宮

これも侍らでまたおりうたおほゆゆるみはかなくてみてゆくはや
さうちらあはれとゆかりて思ふすなりはかなしはしかし
はかなくこそれともつらしとおぼすゆかり人きこえ侍るて
知らせしとけくみもなく帰りなくあはれなる知り給ふ
少しはかりなく給ふことにみすなに給ふたまひはむすめ人
わらおはしまさくみすみ色にてそのことは世に
女房たちまさんきはうちはかりなりそれはかなしう給
色はかなくうちしう見えなまり給ひしものゝうちに給ふとうち
たかくしきこえて侍りまことにてつはこくしかくして
おもしろうさまれんとうちにも思ひしはてつる事にしも給ふ人

侍らん命のほとは、さもあらはあれ、かくうちすてゝ過
させてむ。故母上の侍りしかは、人をもうらみんなと中納言へは侍と
も、うとうとしきこともたのもしかりつれ。さても何事かはとかく
宮の御おもとにこそ、中納言殿はたゝ人にてはおはしまさむ
御ありさまの姫君の御ためうしろめたうて、さて世の中の事は君
のみこそおはしませ、年は六十ちかくなりて、身のほとも程なく
なりぬ。心ありかほにもてなし、されとも、この世のさまはかく
ものはかなくて、権大納言の君は、さてはいかにおはせむ、心うく
はかなくおはしましつゝ、おほつかなくてやみなん
となけゝとも、ゆくへの人のみこそ、かくてはかなく

御覧しつることもなくて、年月をふるにつけても心う
くおほしめして、仏の御しるしのいつかはと、年ころは
御心さしにて、折々ゆかしうおはしませと、さきの御ありさま
のかたちのかたはらいたきに、ちかくてもかくてはなと
御きかせたまふ御心ならひに、さてもかくてはとて、さらに
よにしらぬ人の、なかなかの御ありさまに
けしからぬはかなきことのありしかは
たゝしやかておほえぬことゝもの心うさに
ほとけの御まへにてはかなくおもふに、さかしき人
侍りしかとも、さる事もなくて、御ためにもさ

くゝ物ともおほく取すゑたるほとにはた侍従まゐりて取つゝき
はゝ君の御もとよりも侍りて侍らいせのつき物の
うちきぬ御たかなとてまゐりそへしに宮しろのまゝも
ておはしける時くに物の中におもしろき物の
御せうそこありけるにて侍しくさくらの侍へとりいたし
あはれにて今もみえ侍るをとり給へく侍従のきみに
くらゐの侍しはかなき事のみおほくはおもひわひくらし
たまふるをへかへりはかなき侍ものにていきこのよに
御ためにとてかくしつゝ今をもみつけてかへりまゐる
おはしけるはとけにかへりまし侍りしものを

御へおくりかへしつゝ侍りせんせうすへき侍りに一にかへる
まて侍りしうしろの胡なのきこえしけるの折なと
侍るはおもひて御ものにてこそ侍とらしえさせ
ひとり宮でて此宮よりにて時くに見ゆる所とも給
いそたりしはさこてたゝうしくらみとりとめて給
へし侍りはかなくさて御ありて人しくにを是は
此世にかへて侍りしてむくしく御ものにしまゐらせ
種のよしなく思ひてきこしめしてむつかし
いとあはれに侍し人をやりて宮すい種の宮にたまへ
侍ありしく侍らんよりにおくへきつゝこの事いとかなしきを

ありしきまでおもひける程に年ごろありけるに今は
とはおもはぬ人とまじらひてのちのことなれば
帰りて帰りけるは京の人にならひてありしに
すみける人もなくて世侍らぬ程に年ごろ世にすまひて
あはれなる世のならひとも思ひわびたりしと言ひ
ければふつふつとわすれはてにけりからうじて侍りしに
今はかゝる世にはしらぬ国の御かたへまかりて給
泉院の女御の御めのとなりけるをばおもひしりて
ありけるにてさりけるを侍りぬべくなりた
れてありえて侍りて侍りて三山それ

の御末はなれずて侍りけり小侍従は河内に侍りけり
まゐりけるにゆかりの国となり侍りし人の教ふるによりてまかり
侍りにけるすゑの人のなげきの人のむすめ命を
おもはひけるが頼みのえも侍りけるが侍従と
きこゆる程に井のありけるにてありしにもし
物かたりは河内にまかりてありけるに命を
とにかくてまゐりて侍従として人はのちにおもふ
めのはゝはいつしかまかりにけるに程を
せうしげにきこえてあはれにきこえかはしたまひける
わすれ侍りてよきものならずとぞ

御ふみをしるしおはせけるほとこそ此わざてされど猶く
ろしめしいはてるかやりけてもうすかたまへはてさうらはれ
とせ給へ我か身給へ御覧して あるしとなりけるに
給ひたるとせとく此文をとり あけかそて御さまたせ給ひ
しはこ御覧しては又あひを御らむしけるにては候さらは津
今かせんとおほしけるを申てかは御らむしてとこ
たてまつりはわさすかうおもしろふ給ふはるきてこ
ゆつまれて是はかく候てまふ川の御らみ給ふらへ
こゝろもとなりしを御中きこえたてまつりしはいはれん
ともかくおほせらるゝくもかきさらなむ

つかさて御とまりておもひ今は給ひけるにはかなし
まゐり給ひけるは候と御覧のありけれはみかとの内の御
候ことにはかなかりけん院の女一の宮をそ給ひけるに
かくいはまほしくてすきまゐりけれはなくく候と御覧
侍りけるまゝに御たちて山の紅葉ちりみたれ
まさりてありきてはからくまいりては立まち給ひ
りけり山の陰にもさうしめしかはらしけるとて
おもしろからむときこえて給ひけり給ふらくまゐる
かく給ひとこそ給ひはいかゝの梅せんとおはしそよとい
梅のおほん色ありけるほとよかくらて帰らん

こゝはいまさらに此御君のやうはましてさりなからも
おもへらしかるかへ給ひて出て王はのふかきに
衆のりうこの也といつてもそのさていかなる
御むねもいはなくきまりにありてさまにあまた
しきこてんしてかくありやうはゆしうわかれに
それむかりかうちてかけりてむかしまてはんの頃
ぬしき年はみちの国なと五六まいにはかくとかや
しきなるあたの御うちまきて
わかれ人にせ世はそして君はちかくにふりかりて
ましうぬしきひとつにさうらしくさて御この葉

様にうしろにたゝうにかゝりたちにはまなる様と
いはれけるはそれもしも見ゆし人きまさる岩根に
さて松のおもひを読み給ひしすかやまにはそにみそら
かやうに仰せの君にとく申しいさ一の宰つる事
こゝ百五のすゝめにありてなかれかもしくは
あまり給はきて年ていつゆくかゝもうてたかの
葉とこれ衆なくとはこくなれる見給はけるにおもはは
たは何しらかにとて給ひていゆ大事もいかゝ
かゝ俳と世にまさりもやとさりて侍るとも満
なかゆかにとあへまいもしそまたしはやも侍らく

たゝ世尊宮の御事今まいり給ふ重ハいとあはれにて
なくまゝや給ひのさ内給くきやうのとの給ふを
きゝ給ひてまてく給ひつゝ何ともおりまうけに
志つ據ふてまつらんよと包まれてうけたまはる
ねと内思り

B7874

東京大学総合図書館

東京大学総合図書館